

## 最後の三日間

梶門 圭

壁一面に白い布が張り巡らされ、襖を取り払った奥の部屋の祭壇に、父の柩が安置されていた。

通夜の準備が進められていて慌ただしい部屋に、男は弟の秀一（しゅういち）に導かれるように入ってきた。杏子（きょうこ）は柩の近くにいて男を見た。

男は一瞬立ち止まり、柩を凝視した。秀一に促されて祭壇の前に正座したが、ずっと柩を見つめている。

秀一が線香をつけ手渡すと、頭を下げるようにして受け取り香炉に立てた。肩を震わせ、長い間手を合わせている。

「親父、直人（なおと）が来たよ」

秀一は柩の中の父に、男の来訪を告げた。男は柩の中をのぞきこむと、父の顔を撫でながら、必死で堪えてきたものが溢れだしたようにいきなり泣き出した。

泣きながらしきりに話しかける。

「東京に来てくれるのを待っていたのに……」「親父、おやじ……会いたかったよ」

言葉が途切れとぎれに聞こえてくる。

男は肩を震わせ、柩の中に身を沈めんばかりに泣き崩れた。杏子や秀一や周りに人がいることなど、まるで気にも止めていないようだ。

杏子は咄嗟のことで、呆気にとられていた。嫁二人も部屋をのぞき、庭から花輪を運んでいた葬儀社の社員たちは、足を止めて遠巻きに見ていた。秀一は眼を赤くしながら、男の背中に手をおいた。

「直人、よくきてくれたね。親父も喜んでるよ。きつと」

男の名前は吉川直人。やはりあの女の息子だった。高校を卒業して東京の会社に就職したのを機に、家族で東京に引っ越して行つたと、母から聞いていた。

「連絡をありがとうございました」

涙声で秀一に礼を言った。

「突然だったのによく来てくれたね」

「運よく、朝一番の便が取れたので……」

二人はすでにどこかで会ったことがあるのか、交わす言葉が親しげに聞こえる。

杏子は直人の顔を一度も見たことがなかった。父の通夜で、諍いの原因となつたあの女の息子に会うことになるうとは、迂闊なことに考えもしなかった。

杏子は母の部屋で座り込んでしまった。

直人の母親が我が家に乗りに来たのは、杏子が中学一年の冬の夜だった。

居間をのぞくと、着飾つた女の人が両親と向かい合つて座っていた。テーブルの上にはお茶も出ていなかった。

「ただいま。母ちゃんどうしたの。お客さん？」

「おかえり。遅かった……」

「自分の部屋に行つてなさい」

母の言葉を遮つて、父が怒つた口調で言った。女の人がつけている香水なのか。むせるようなにおいが、部屋中に漂っていた。

真冬なのに、髪を結びあげ首筋が露わになつた耳たぶには白い大きなイヤリングをしている。ウエーブのついた髪が一筋ほつれて首にかかつていた。華やかな花柄のワンピースが場違いな感じだった。化粧した白い顔に赤い口紅が際立ち、手には口紅と同じマニキュアが光っていた。部屋の雰囲気からは明らかに浮いていて、杏子には印象が悪かった。

秀一の部屋をのぞくと、末っ子の隆二（りゅうじ）と二人で息をひそめていた。居間からは、母と女の激しくやりあう声が聞こえてきた。

「さつきから妻、妻って。ふん、何が、妻ね」

「家庭があることは知ってのことでしょう？ 人の家庭に土足で踏み込んで。恥知らず！ お父さん、あんたもあんただね。こんな女に、よくもまあ……」

女の人が、母の言葉を遮る。

「ええ、奥さんよ、あんたはまだ愛されていると思ってるの？ うち、妊娠してるのよ。わかるね？ この人の子どもを産むのよ」

後の言葉は、怒鳴りあう声でかき消される。テーブルをドンドンと叩く音がして、父の声が聞こえなかった。杏子は緊張して、口の中がカラカラに乾いてきた。

「姉ちゃんが見てくる」

杏子が部屋を出ると弟二人もついてきた。そのとき、居間から女の人が

出てきた。杏子たちがびっくりして立ち止まると

「また、来るさあね」

と言い、にやりと笑って出て行った。

その日を境に、女は昼夜の別なく家にやってきて、離婚届けに判を押せと迫ったが、母はもちろん取り合はずがない。

「ええ、あの人はあんたのところには帰らないよ。あんたとはもう終わったんだよ」

女は居丈高に怒鳴り散らした。

「出ていけ！」

母も負けてはいない。

「ここに近寄らないで。あんたがくるところじゃないのよ。早く出ていけ。今度来たら、ただでおかないから」

大声で叫び、女の靴を外に放り投げた。

杏子は、いつからか女の靴がハイヒールでないのに気がついた。服装も

あの夜とはずいぶん違っていた。

(白いぴらぴらしたブラウスだし、ネズミ色のスカートだ。靴だって……)  
女はあの夜、初めて母に対決するために、精一杯着飾って乗り込んできたのだろうか。

父は家を空けることが多くなり、母は塞ぎこむようになった。女はお腹が目立ってきた。

「うちは子供が生まれるんだからね。あの人も、とつても喜んでいるよ。だから早く別れなさいよね」

はちきれそうな腹を突き出し、勝ち誇ったように女は平然と言った。時々酒の匂いをさせて、お腹を見せつけるように女は懲りずにやってきた。

(あのとき女のお腹にいたのが、あの男というわけか)

杏子は何かにつけて母の愚痴を聞いていたが、女が家族で東京に引越して行つてからは、父も母も落ち着きを取り戻していた。

深呼吸をしてふと目をあげた先に、母の着古したブラウスとエプロンが、

ハンガーから今にもずり落ちそうになって下がっていた。

高校卒業後に家を出た杏子のアパートまで、サンダルにエプロン姿のまま歩いてきた母の姿が目には浮かぶ。杏子が歩いて三十分の道のりを、母は一時間もかかって歩いてくるのだった。大抵は父との諍いにたえられずに家を飛び出し、杏子のアパートにたどり着く。

杏子の顔を見ると、「顔を見たかったから」と言いながら、すぐに帰つて行こうとする。肩を落とし歩く母を送りながら、母の寂しさを感じた。

父への反発から、止める母を振り切つて家を出てしまい、母を孤独に追い込んでしまった強い後悔が杏子の中にある。

母は今、父が死んだのも知らずに病院のベッドに横たわっている。

車の往来も道行く人もまだ少なく、閑散とした早朝の道路を、タクシーをとばして総合病院内の入所施設に駆け付けたとき、部屋には秀一が一人だけうなだれて立っていた。父は脳梗塞のリハビリ中だった。

「父さん?……」

杏子は思わず呼びかけた。

「親父、逝っちゃったよ」

秀一は、肩を震わせすすり泣いた。

「……嘘でしょ」

ベッドに近寄り父の顔をのぞくと、静かに眠っているようだ。

痩せて骨ばった手が胸の上で組まれている。まだかすかに温もりがあるような気がして、杏子は父の胸に手をあてた。心臓は鼓動を伝えない。

今日の未明、いつもなら大きく響いている父の鼾が聞こえないのを、見回りにきた看護師が不思議に思い、カーテンを開けてみて異変に気づいた。すぐに主治医に連絡をとり蘇生処置を施したというが、繋がれた計器に一度も命の波動が戻ることはなかったという。

杏子は、ベッド脇の椅子に座り込んで呆然としていた。

「夕べ会ったときは元気だったのに……」

妙に人恋しげだった父の顔が思い出された。

食事の介護のあと、七時半になり秀一と入れ替わりに席を立ち、部屋を出て行こうとすると、父は寂しそうな顔をして杏子を見ていた。廊下を歩く杏子を、父の視線が追ってくる気がして後ろ髪引かれた。

父は誰にも看取られなかった。まだ八十歳で、突然逝ってしまうのは何かひどく不意を突かれた感じだった。

「俺だって信じられないよ。夕べは、おにぎりが食べたと言っていたから、三枚肉の油味噌入れて持ってくるつもりだったのに……」

涙もろい秀一は、つぶやくように言って涙をすすった。

「みんなに、知らせなきゃ」

杏子が言うのと、

「勇介(ゆうすけ)さんに頼んだよ」

夫に知らせると、みんなには自分が連絡すると言っていたらしい。

定年後、父は八年程仕事を続けた。団体の役員を辞めてからも、しばらく

くはつきあいも賑やかで、元気で澁刺としていた。

七十歳を超えたあたりから徐々にだが衰えが見え始めた。胃の手術をしてからはさらに気弱になり、好きなゴルフや飲み会などの外出もめっきり減っていた。日がな一日、母と二人でテレビの前に座り込んでいる日が多くなっていた。

家族が揃ったところで、今後の段取りが話し合われた。通夜は家で行うことになり、秀一が弟夫婦に早く実家に戻って準備をするようにと指示をしている。

葬儀社の手配や役所の届けなどに、秀一は気を取り直し飛び出して行った。杏子と夫が病院に残り、遺体と一緒に葬儀社の車で実家に帰ってきた。

「姉ちゃん、ちょっと」

秀一がドアを開けた。杏子は我にかえった。

「ちょっと来てよ」

杏子は部屋を出た。家中が通夜の準備でごった返している。

「直人、ここにおいでよ」

焼香を終え、和室の隅にひとりで座っている男に、秀一が声をかけた。

「家中ゴタゴタして。みんな、直人だよ。今日、東京から来てくれた」

秀一は直人を台所に引っ張ってきて紹介した。遠慮ぎみに立っている。忙しく立ち働いていた義妹二人が、手を休めて男を見た。

「直人、うちの姉の杏子です」

うつむき加減で立っていた直人は、背を伸ばして杏子を見た。無言で頭を下げた。

台所のテーブルには、黒塗りの膳が三十枚程積まれ、吸物椀がうず高く箆に伏せられている。コンロには大きな鍋がかけられ、湯気をふきだしていた。流し台には肉や結ばれた昆布が竹箆に積まれ、二つの電気釜が湯気をふいていた。

杏子は、初めて正面から直人を見た。秀一と見比べると、悔しいが直人

の方が父の若い頃に似ている。秀一も背は低いほうではないが、直人は秀一より十センチくらい高く見える。杏子は、どうにも顔が強張っていくのをとめられない。

「宿はどこに取ってあるの?」

秀一が訊いた。

「牧志の観光ホテルです」

「通夜の法要は四時からで、家族だけだから、間に合わせておいでよ」

「ありがとうございます。着替えて、また……お邪魔します」

直人は伏し目で秀一に答える。杏子は黙って二人を見ていた。

「東京行ってどれぐらいになったかな? お母さんは元気?」

秀一が、その場を取り繕うように訊いた。

（お母さん元気、だって?）

杏子は心の中で毒づいた。

「あ……あの」

直人は一瞬言い淀んで、

「東京での生活は、もう二十五年過ぎました。……母は、体調が思わしくなくて、今は入院しています」

「そうか、それは大変だね。告別式は明後日だけど、それまでいられるのかな」

「二人の姉が交代でついているので、大丈夫です」

姉二人……直人には、きょうだいがいた。

直人の母親は、いくつになっただろう。母とは三歳ぐらいの年の差だったはずで、ゆうに七十五歳は超えている。どんな病気で入院しているのか。父が亡くなったことが女にも伝わっているのなら、どんな気持ちで聞き、息子を送りだしたのだろう。父を懐かしむ気持ちはあったのだろうか。母に対して、少しでも呵責の気持はあったのか。

明日は友引。父の葬儀は明後日、朝九時出棺、午後二時告別式となって

いた。

「じゃあ、あとで。来てくれよ」

直人は頷いた。秀一は背中に手をやりながら、玄関に向かっていった。

「あの……」

杏子は後ろから、直人に声をかけた。直人は足をとめ、振り返って杏子を見た。何を言うのだろうと思っっているのか、警戒するような緊張した顔だ。

「午後には入院している母を、一時帰宅させます。母にはそちらが来ていることを知られたくないので、そのように心得ていてください」

杏子は一息に言った。直人の表情に困惑の色が見えた。

「……はい」

頭を下げると、すぐに出て行った。秀一が何か言いたそうにしていた。

「何で黙ってあの人を呼んだの？」

杏子は秀一に向かって強い調子で言った。

「何で、って、親父の息子だからじゃないか」

あまりにあっさり言う秀一に杏子は愕然とした。

「電話する前に相談したら、姉ちゃんは、承知したか？ 隆二と勇介さんに話したら知らせるべきだと言ってくれたんだ。すぐに電話したよ」

「あれの母親が、何をしたのか、あんた忘れたの？ 母さんがどんなに苦しんだか……」

「わかってるよ。俺だって、親父にもあいつの母親にも随分腹を立てたし、許せないって思ってたさ。だけど、直人にあの言い方はないだろう」

「……」

「直人の責任じゃないだろう？ ほんとは親父が生きている時に会わせてやるべきだったと思ってるよ……親父も直人に会いたがっていたんじゃないかって。かわいそうなことした」

秀一はあくまでも直人を気遣う。

「うちなんか知らないだけよ。父さんは毎日連絡取っていたよ」



杏子はむきになった。

「いいじゃないか。連絡とるぐらい当り前だろう。親父だってそれが気持ちの張りになっていたならそれでよかったんじゃないの。経緯はどうでも、彼にとつては間違いない父親だし、直人に罪はないよ。とにかく、ゴチャゴチャ揉めている場合じゃないんだよ」

秀一が直人をかばうほどに、杏子の胸のうちはおさまらない。

「姉ちゃん、俺も五十になつたし、姉ちゃんもいい年だ。親たちの揉め事を引きずるのは、もういい加減やめよう」

秀一は話しを打ち切ると、和室に入つて行つた。

父と母との諍いや父と杏子の確執のすべてはあの家族が原因だと思つと、やはり穏やかではいられない。秀一とは違うのだ。

あの女のこと母が苦しむ様子を見るにつけ、父やあの女に対する憎しみは杏子の中で膨らんでいった。

杏子は父が亡くなる今日まで、心のわだかまりを拭い去ることができず、

心から介護や看病をする気になれなかった。直人の突然の訪問は、父が急死したことへの衝撃に加え杏子の心をかき乱していた。

「あの、お父様の遺影のお写真を決めていたのですが」

葬儀社の社員に言われ、写真をさがすためにリビングに入り、急いで幾つものアルバムをテーブルの上にひろげる。

「親父の写真は……」

秀一が入ってきて催促した。

「これ」

太い黒ぶち眼鏡をかけ、表情はいくぶん硬いが顔の輪郭がはっきりした、一枚の写真を渡した。

「親父らしくていいね」

秀一はドカッとソファに腰をおとし、写真にじっと見入っていたが「姉ちゃん、直人のこと、腹が立つかも知れないけど、考えてやってくれよ」

いきなり話し始めた。

「あいつも可哀そうな奴なんだよ。上に姉が二人いるって言っただらう？  
年も離れていてそれぞれ父親が違うというし、家庭的にもいろいろあった  
と思う。親父は直人のことを不憫に思っ、できる限り一緒にいてやった  
んじゃないかな」

「それ、誰に聞いたの？」

「親父に」

「ふうん……」

「それに、俺と隆二は直人に会うの、これが初めてじゃないんだ」

「そんな気がした。あんたたちの様子見てて、なんとなくだけどね」

「直人が三、四歳のときから、親父は俺と隆二と一緒に連れ歩いたよ。直人  
が俺たちの弟だと、認めてもらいたかったんじゃないか……」

秀一は遠くを見るような目をして言った。

秀一にそんな話しをされたところで、心は動かない。秀一や隆二とは経  
験したことが違うのだと杏子は思う。

父が女の家に住み着いてから父の給料は女に先取りされ、杏子たちは経  
済的に追い込まれ苦しい生活だった。

母は保険の外交員をしていて、営業成績を上げるために夜遅く帰ること  
も度々だった。企業を訪問したり、知り合いを訪ねて、保険の紹介に行っ  
たりしていたらしい。休みの日も時間を惜しんで、知人を訪ねて行っては  
営業をしていた。

保険の契約を取るため客に誘われて、飲んで夜中に帰ってくることも  
あった。胃弱な母は無理して飲んできたのか、目じりに涙を浮かべてトイ  
レで吐いていた。母の背中をさすりながら、杏子は悲しかった。ふくよか  
だった母の頬がしだいにこけていき、気に入って着ていたスーツのスカ  
トが一回転するのを見て不安だった。

女との騒動が半年を過ぎたころ、まったく帰ってこなくなった父の職場

に、給料を取りに行くのが杏子の大事な役割になった。

成績によって左右される母の保険の収入だけでは、生活の見通しが立たなくなっていた。建てたばかりの家のローンや公共料金などが滞りがちになり、いくつもの請求書や督促状が届く。母の深いため息が杏子を父の職場に向かわせた。

父の職場にお金をもらいに行くなど、中学二年の杏子にとって考えただけでも気の滅入ることだったが、行くしかなかった。

しかし、杏子が父の職場に来ていることを知ると、女は先まわりして給料を持ち帰っていくようになった。職場の外で女と鉢合わせたとき、すごい形相でどろぼうと怒鳴られたことが二度もあった。

どっちが泥棒なんだ。怒りが爆発しそうになりながら、投げつける言葉が出てこなかった。殺してやりたいと思いつつ、家に帰る道々悔しさのあまり、涙が流れてしかたがなかった。

父は時おり金を工面して、杏子を呼び出した。何を話すでもなく、二人

でもくもくとそばを食べた。涙をすすりながらそばを食べる杏子に

「もう少し、我慢してくれな」

と、言いながら封筒を手渡した。父は何を考えていたのか。何をいつまで我慢するのか。詰問する杏子に父の返事はなかった。

ひどい父親だと思った。

女は小さなスナックをやってしていると、母から聞いていたが、今考えると父と女との生活も苦しかったのだろうか。

女が母に対して執拗に離婚を迫った裏には、女としての父への執着と三人の子どもを抱え、生活の安定を求めたためだったのか。

あの頃を思い出すと、今では屈辱感や憎悪より疲労感で心が重たくなる。

「姉ちゃん、おふくろを迎えに行ってくれないか」

「……母さんに話すの、辛いなあ」

「……おふくろのことは頼むよ」

そのとき、母の妹である叔母が手提げバッグを持って入ってきた。

「遅くなってごめんね。驚いて……店閉めて、急いできたのよ」  
息が切れている。

「ありがとう、叔母ちゃん」

杏子は、光子叔母の手から手提げバッグを受けとりながら言った。すぐに和室に入って行った叔母は、祭壇の前に正座して線香を立て手を合わせている。

柩をのぞきこんで

「あいなあ……義兄さんよ。逝っちゃったのね、ほんとに。そんなに早く逝ってしまつて、姉さんどうするのよお」

叔母は涙を拭いた。

「叔母ちゃん、来たばかりで悪いんだけど、姉ちゃんと一緒に、母ちゃんを迎えに行ってもらつていいかな」

叔母が落ち着いたところを見計らつて、秀一が言った。

「いいよ。杏子と行つてくるさ」

「坊さんは四時に来るから、それまでに母ちゃん連れて帰ってきてほしい」  
「姉さんにどう言つたらいいかね。姉さんよ、ひっくり返らんか心配さあ」  
叔母は泣いてばかりだ。台所の椅子に座ると、いれてくれたお茶を一気に飲み干した。

杏子は和室をのぞいた。通夜の準備は整い、あとは遺影を飾るだけになっている。柩の前に座つて、しみじみ父の顔を覗き込んだ。

父はもう話すことも、怒ることも、愚痴をこぼすことも二度とない。杏子と口汚く罵り合うこともない。明後日には、肉体は永遠に喪われる。

杏子の父にたいするわだかまりは、家族の中に常に波風を立て、平穏な日常とはいかなかった。責め続けられた父も、そばで杏子との諍いを見続けた母も苦しかったに違いない。しかし、杏子は非難をやめず、それが今日の遠因になったのだとしたら……胸に痛みがはしる。

ふと、柩の前の焼香台を見ると、香典袋が置かれていた。「吉川直人」と書かれていた。

どうやら父の字の質はあの男が継いでいるらしい。直人の字は達筆な字で父の筆跡によく似ている。手に取ると、その下にもう一人分ある。

(えー！)

目が釘づけになった。あの女からのものだった。杏子は香典袋を手に取り、見つめていると思わず握りつぶしてしまった。

「何するんだよ。姉ちゃん」

いつの間に来ていたのか、秀一が杏子の手から香典袋を奪い取った。

くしゃくしゃになった香典袋を丹念に伸ばし、名前を確認すると直人の袋の下に置いた。

「ばかなことするな。最後ぐらい親父を安らかにさせてくれよ」

杏子はさすがにバツが悪かった。

部屋から逃げるように、叔母を急かせて家を出た。タクシーを止め、母の病院に向かった。父が亡くなったことを知らせるべきかどうか、まだ迷

いの中にいた。

タクシーの中で叔母は、

「姉さんはだいじょうぶかねえ、心配さあ」

考え込むように言った。

「若い時はいろいろあったけど、この頃は落ち着いて、どこに行くにも義兄さんと二人一緒に、病院に行ったり、買い物に行ったりして、うちは安心していたのよお」

叔母は、ため息混じりにつぶやいた。

「義兄さんたちは親の反対を振り切って、島を出て一緒になったけど、姉さんは苦勞ばっかりしてさあ」

父は二十歳のとき母の生まれ島に代用教員として赴任してきた。そのとき母と出会った。父は男前で社交的で、島の娘たちの憧れだった。村の青年団活動をする中で、父と母は親しくなっていたようだ。

「姉さんは器量がよくて頭もよかったよ。上の学校にいきたがっていたけ

ど、きょうだいが九人もいたから諦めたみたいさ。嫁にもらいたって言う人が何人かいてね。島で結婚していたら苦勞もしなかったはずなのにね」島での代用教員を終えて、本島に行くことになったとき、一緒に来てほしいと父に言われた。

そのことを知った祖父は、青年団活動と称しながら島の若い女との噂の多い男に、娘をやるわけにいかないと反対したという。しかし、母は祖父の反対を振り切り、父とともに島を出てきた。

「叔母ちゃん。母さんは、なんであの女に子どもができたと知ったときに別れなかったんだらうね」

叔母は言葉を選ぶように

「義兄さんは優しい人だから、姉さんは自分や子どもたちを見捨てる人じゃないって、信じていたんじゃないかね？ あんたたち子どもが三人もいたし、ほんとは子煩悩で家族思いなのよ。あんたもそれはわかるでしょう」杏子はそれには答えず

「さっき、あの女の息子がきてね。手を合わせて行ったよ」

と言った。

「え！ そうね。秀一が知らせたのかね」

「そうみたい」

「……あの母親とはどうであれ、あの子は義兄さんの血をわけた息子だからね。会わさないわけにはいかないでしょう」

「……」

「あんたは許せないはずだけど、怨んだり憎んだりして暮らすのは苦しいことだよ。あんたも子どもの時にこんな大人の騒動に巻き込まれて大変だった。でも、もう忘れなさい。義兄さんも亡くなってしまって、これからは姉さんの介護が大変だよ」

叔母のいうとおりだろう。杏子は気持ちが萎えていくのを感じていた。

タクシーが病院の正面玄関で停まった。料金を払い、タクシーを降りたものの、杏子も叔母もすぐに病室に行く気になれなかった。病棟のエレベ―

ターホール前で、ソファアに座り込んでいた。

「こんなことしていてもしょうがないよ。杏子、行こうか」

叔母に促され、杏子はエレベーターのボタンを押した。六階の病棟まで上がり、看護師の詰め所で事情を話し、母の外出の手続きを済ませた。

病室に行くと母は、やせ細った身体を曲げて眠っていた。

「姉さん、元気ねえ。今日はね家に帰ってもいいって。看護師さんから許可もらって来たから帰ろうね」

叔母が母の髪を撫でた。

「退院、できるわけ？」

「父さんが家で待ってるよ。だから……帰ろう」

杏子はベッドに腰掛け、服の襟もとをなおしながら、母に言った。

「お父さんは、退院したの？ いつ？」

母の目に光がさした。杏子はこみあげそうになった。

担当の看護師がやってきた。

「吉川さん、着替えましょうね。すみませんが、ちょっと出ていてもらえますか」

母の目が不安そうに杏子を見た。

「母さん、そこで待ってるから大丈夫よ」

看護師が勢いよくカーテンを引いた。杏子と叔母はカーテンのそばに立って待った。

五分ほどして、看護師は、終わりましたよ、と言いながら部屋を出て行った。靴下を履いた母の足はまるで木の棒ようだ。

叔母が車いすを押ししてきた。母を抱き起して、叔母と二人がかりで車いすに乗せた。

叔母が母の髪を撫でている。早くに夫と死に別れて、美容師をしながら一人娘を育てた叔母は、いつも母の髪のカットやパーマをかけてくれた。た。

「あんだ、休みだったの？」

母は叔母に訊いてきた。

「そうよ。今日は休んだのよ。姉さんに会いたくて……」

叔母は答えながら、目のふちが赤くなってきた。

「あのね、父さんね、亡くなったのよ。だから、うちにお別れしに行こうね」「なに……？ 誰がうちに来るの」

母はきよとんとして言う。杏子は叔母と顔を見合わせた。繰り返して言うことができなかった。

タクシー乗り場で、運転手に手伝ってもらいタクシーに乗せた。

「どこに行くの？」

母は顔をゆがめて言う。叔母は黙りこくっている。二十分ほどして、バス通りから路地に入り、タクシーを停めた。ブーゲンビリアの蔭が這っている壁が見えた。家に着いたことがわかったのか。母が顔をあげて車の窓から周りを見ている。

家の周りにはクジラ幕がめぐらされて、この家に何が起きたのか、一目瞭然である。黒い背広姿の男たちが、香典返しの箱を運んで行く。突然母が泣き出した。

「お母ちゃん、お帰り」

隆二が出てきて、母を抱きかかえるようにしてタクシーからおろした。母は子どものように泣きじゃくっている。

「おばあちゃん、お帰りなさい」

姪が玄関で迎えると、泣いていた母は

「来てくれたの。うれしいさあ」

満面に笑みを浮かべている。杏子と叔母は顔を見合わせ苦笑した。

驚いたことに、家中の壁に取り付けられた手すりを伝って、母は和室のほうに歩いて行く。白い布に覆われた和室の様子に戸惑っているようだ。叔母が後をついて行く。

杏子は母の手をひいて、祭壇の方に歩いた。柩の前に立ち止まって、横たわっている父の顔をのぞきこんでいる。



「あい、お父さん、父ちゃん。なんでこんなところに寝てるの？ 風邪ひくよ」

腰を落とし、父にしきりに呼びかけた。

「ええ、お父さん」

優しい声で呼びかけながら、父の額に手を触れた。すぐにびくつとして手を引っ込めた。次の瞬間、身体を硬直させてひっくり返ってしまった。

一瞬人の動きが止まり、それから騒然となった。倒れている母を、奥にある母の部屋に運んでもらいベッドに寝かせた。杏子は、肌掛け布団を引き寄せそつと被せたが、痙攣したように倒れてしまった母の姿に動転していた。

夫が部屋に入ってきた。

「お義母さん、無理しないで休んでいてくださいね」

声をかけると、母は布団から顔半部だけ出して、夫の顔をじつと見ている。何も言わずまた頭から布団をかぶってしまった。

「あの人、来てるの？」

小さな声で夫に聞いた。

「いや、まだだよ。君はお義母さんについていたほうがいいね」

夫も声をひそめる。

「そうする」

杏子は、母のそばで横になり、背中から母を抱いた。布団から出ている母の指が、ときおりもぞもぞと動く。左手の薬指にゴールドの結婚指輪が光っている。

四時すぎに坊さんがやってきた。母を起こし喪服を着せ、いつもの籐椅子に坐らせた。

法要が始まった。鐘が鳴り響くと、母はビクツと飛び上がるように身体を震わせた。杏子は母の手を握り、大丈夫よと耳打ちした。家中に線香の匂いが充満し、読経の声が響いた。一人一人、家族と親戚の焼香が続いて

いく。

夕方になると、隣近所や、父の友人や知人など弔問客が訪れた。直人は姿を現さなかった。父と母の郷里からはマイクロバスを借り切り親戚が大勢やってきた。焼香を済ませると、母に声をかけていた。

「今日は島に帰って、明後日また来るね」

「おばさん、力落とさんでねえ」

従妹が母に寄って手を握った。母は顔をくしゃくしゃに歪めて、手を握り返していた。客が一段落したころ、母を部屋に連れて行きベッドに横たえたが寝付けないようすだった。

直人は遅い時間に現れた。家族がいる中を祭壇に向かって進んで行く。長いこと手を合わせている。

焼香台から膝をずらして柩ににじり寄った。縁に手を置き、父の顔に見入りしきりに話しかけている。父と直人にしかわからない会話なのかもしれない。

「あんたはだれねえ」

その声に驚いて、杏子が振り向くのと、秀一と夫も同時だった。直人はさっと柩から離れた。

眠っていると思っていた母が、手すりに寄りかかり立っている。直人に気を取られ、母のことに気がまわらなかった。近くにいた夫が素早く立ち上がった。

「お義母さん、大丈夫ですか。まだ眠っていていいのに」

夫は側に行き、母の手を取った。

「お義父さんのお知り合いの方の息子さんらしいですよ。お父さんの代わりにお焼香にいらしたんです」

夫は取り繕うように説明して、椅子に母を座らせた。

「この度は……」

消え入りそうな声で、直人は顔をふせたままで深くお辞儀した。

「ありがとうね。お父さんの名前はなんていうの？ お父さんにもよろし

くお礼を言ってね」

母は直人をじつと見て、言った。

「ほら、ちゃんとお膳を出して」

母は意外なほど元気な声で、義妹に言いつけた。膳が運ばれると直人は、困った顔をしている。母はそんな直人の様子をじつと見ていた。

「誰の息子って？」

「父さんの昔の同僚の息子さんだって」

と杏子は答えたが、母は何も言わずにさつきからただ直人を見つめていた。直人は出された膳を前にして、緊張した様子で正座している。

「お腹すいているでしょう。どうぞ、遠慮しないで箸を取ってください」

母が勧めると、直人は麦茶の入ったグラスに手をのばし、遠慮がちに口をつけた。

「それでは、これで」

しばらくして直人が立ちあがると

「おとうさんに、よろしく伝えてくださいね」

母は大きな声で言った。

「車に気をつけて。ありがとうねえ」

母の言葉にお辞儀を返すと、部屋を出て行った。これは母のいつもの口癖だ。直人には気づいていない。

通夜の客もいなくなり、家族だけになった。父の柩にすがりつき、何かずつつぶやいている母のやせ細った背中が寂しそうだった。

「母さん、疲れるといけないから、もう部屋に行って休もうね。今日はみんなが父ちゃんのそばについているからね」

杏子は母を部屋に連れて行き、ベッドに横たえた。

「杏子。ありがとうね。やっぱり家はいいねえ。お父さんはもう寝たの？」

（え！）と、母を見たが、杏子はすぐに

「うん。父さんはもう休んだよ」

母は、うんうんと頷いている。

「スタンドつけておくから、トイレに行きたいときは呼んでね。我慢したらだめだよ」

「わかったよ」

電気を消し、部屋を出ようとすると母に呼びとめられた。母は掛け布団から顔を半分だけ出して、じっと杏子を見つめていた。

「あんたと父ちゃんはよく喧嘩していたねえ……だけどね、父ちゃんはいつもあんたを頼りにしていたさ」

「ええ？ どうしたの？ 母さん」

「ほかの誰よりも、あんたが一番父ちゃんに似ているよ。だからよく喧嘩したのかねえ」

「ほかの誰かって、誰よ？」

杏子が訊ねると、

「もう寝るさあ。おやすみ……」

布団ですっぽり顔を隠してしまった。大きく息を吐き出すのが聞こえ静

かになった。杏子は部屋のドアを閉め、しばらく立ちつくしてしまった。

母は、直人を見て何かを感じたのだろうか。杏子はもう一度ドアを開け中の様子をうかがった。母は布団で顔を隠したままだ。眠っているのだろうか。

「母さん」

呼びかけてみたが返事はなかった。

杏子は、そっとドアを閉めて和室に戻った。和室では、夫と弟たちが何やら話し込んでいる。

「母さんは？」

杏子に気づいた秀一が訊いた。

「もう眠ってる」

男たちの間を通り、祭壇の前に座って遺影を見る。表情の強張った写真の顔が、何か言いたそうに見つめている。

柩のそばにいき、中をのぞきこんだ。遺体の周りには白い布にくるまれ

たドライアイスが入れられ、冷たい静寂に包まれていた。もう何度柩を覗き込んだことだろう。父と過ごす時間は残り少なくなっている。

母の部屋で横になると、目まぐるしかった今日一日のことが思い返された。父の死に心を寄せる暇もなく、慌ただしく時間が過ぎ、もう一日が終わろうとしていた。

翌日のことだった。直人は昼過ぎに来て焼香し、しばらく柩のそばにいた。秀一以外とは目を合わさず、言葉もかわさずに座っていた。ときおり柩を覗く。そうしながら一時間ほどいたのだろうか。秀一にだけ合図をし、出て行った。杏子はその態度が気になった。

明日の出棺に備えて杏子は秀一や隆二と泊まり込んでいた。家族はおそくとも明朝八時までには実家に集まることにして、それぞれ自宅に帰っていた。

直人が秀一に話しがしたいと、緊張した面持ちでやってきたのは九時前

だった。直人が祭壇の部屋に入って来たとき

(また来たのか……)

杏子はいい顔をしなかったのだと思う。直人は秀一にどこかで話しをと  
言った。

(話して、何だろう)

杏子は訝しく思い二人を見ていた。秀一は直人と父の部屋に入っていく。  
父の部屋の前に行ってみた。直人が話している。廊下の壁にもたれ、そつ  
と腰を下ろして聞き耳をたてた。

—ここ、親父の部屋ですか……。親父に会いたくて、何度もこの家の前  
まで来たことがあります—

—そうか。あんたも寂しい思いしたんだろうね。気づいたと思うけど、  
姉貴はね、あんたのお母さんのことで、随分長い間親父とはうまくいって  
なかったんだ。中学のときから大人の争いの、とぼっちりをもちにうけた  
からね。あんたのせいじゃないけど、お互いにいろいろあったから、姉の

態度は許してやってくれ――

(あんなこと言ってる……)

杏子は秀一の言葉に苦笑いした。直人の声は聞こえない。

――俺、親父が居る日は嬉しくてまとわりついていましたよ。いなくなっ  
てしまふんじゃないかって心配で。小学生のときは毎日居てくれないのが  
不満でした。なんでなんだろうって――

杏子は直人の話に立てなくなり、息をひそめて聞き入った。こっそり直  
人の話しを盗み聞きすることになるうとは思ひもしなかった。

――一緒にいられる兄さんたちが羨ましかった……。自分だって親父と一  
緒にいていいはずなのに、なんでだろうって。一緒にいられない理由を姉  
二人から聞いたのは六年生の時でした。父にはほかに家族がいるって。姓  
が親父と違っていたりするのでそれまでも変だなとは思っていたけど  
……。今母は酒で身体を壊して入院しているんですが。随分お兄さんたち  
家族に迷惑をかけていたんでしょね……。――

学校で母親の姓で呼ばれると返事をしないのが不憫だと言って、父が直  
人を認知したのは小学校の一、二年生の頃だったはずだ。

母が泣いて父を詰っていた、夜中の台所の光景が杏子の遠い記憶に残っ  
ている

――どうしようもない母親だけど、子どもなことには一生懸命で……。  
……。親父はいつも俺のことを気にかけてくれて……。生まれてこないほう  
が……。荒れたときもあったけど、でも、俺……。親父が俺の父親で、ほんと  
に感謝しているんですよ――  
声が掠れて聞きとれない。

――親父に何一つ、息子らしいことができなくて悔しくて……。――  
――そうか……。――

――明日の出棺のとき、親父と一緒に行かせてください。親父の骨を一緒  
に拾わせてください。こんなこと言って気に障ったらすみませんが、この  
ままでは帰れなくて――

直人は強い口調で、たたみかけるように言った。杏子が立ち上がろうとした時、築四十五年の古い床がミシツと鳴った。

「あれ！ 姉ちゃん、何してるんだよ」

ドアが開いて秀一が顔を出した。廊下に座り込んでいた杏子は立ちあがって中に入った。直人が顔を上げた。

「話、聞いてたの？」

どう返事をしていいのかわからなかった。昨日の遠慮がちな態度の直人とは、明らかに違うものを感じたからだった。

直人の立場などに思いをめぐらせてみたことなどなかった。あの女の家族のことなど知りたくもなかったし、父の息子がどうしているかなど関係のないことだった。

しかし、直人自身も母親に反発したり、父親のいない寂しさや、精神的な苦悩を味わったのかと思うと、平手打ちをくらったような気持ちになった。大人に翻弄されてきたのは直人も同じだったということか。

「何も言える立場でないことはわかっているつもりです。でも、親父とこれが最後だと思うと……最後の日ぐらい」

「姉ちゃん、こう言ってる。いいよね」

「父は幸せね。こんなに思ってくれる息子がいるなんて」

思わずこんな皮肉が口から出た。

「あんたが招んだんだから、あんたが考えればいいでしょ。こっちは母ちゃんのことです。手いっぱいなんだから」

杏子は秀一にそれだけ言うのと部屋を出た。

母の部屋をのぞくと、目を覚ました様子はなかった。母のベッドのそばに広げたままのサマーベッドに静かに腰をおろした。

杏子は、父の最後に立ち会いたいという、直人の言葉が耳に残っていた。直人は、生前の二人の繋がりやの強さを見せつけに来たのかもしれない。

告別式の日には朝から晴れていた。杏子たち遺族が見守る中で出棺の法要

が始まった。坊さんの読経が続き、柩に釘打ちをする前に線香をたむけながら

「親父、今日がもう最期だよ」

秀一が父に声をかけた。母は、虚ろな表情で柩のそばに座っていた。

「お袋。親父はもう行くからね。お別れして」

秀一が母に言った。

「父ちゃんどこにいくの？」

「う、……遠いところだよ」

読経は続いている。

「……お父さんはこんなさ。どこに行くかも言わんで行くからねえ」

母は独り言のようにつぶやいた。

「お袋、手を合わせてよ」

秀一に言われたが、母はうなだれたまま何かをつぶやいている。杏子は母の手を強く握りしめた。柩を運び出し霊柩車に乗せるときも、母は生氣

のないトロンとした目で見つめていた。

霊柩車に乗り込むとき、秀一は杏子に目で合図をよこし直人と一緒に乗り込んだ。秀一は、最後まで父の側にいたいという、直人の願いに応えてやるようだ。家族も直人の存在を心得ていて、ただ静かに見ている感じだった。

霊柩車が出発すると、次男の隆二は自家用車で後に続き、夫と娘も自家用車で向かった。杏子は母や叔母とともに、火葬場まで葬儀社が手配してくれたマイクロバスに乗った。バスの中は静まりかえり、言葉を交わすものはいなかった。

マイクロバスが火葬場に着くと、父の昔の仕事関係者が多く来ていて、霊柩車を迎えるように並んでいた。退職後も、父と交流のあった近しい人たちだ。

霊柩車から柩が降ろされ、焼却場へと運ばれて行く。バスから降りた母も叔母と一緒に車いすで後を追った。



「母ちゃん、親父とお別れだよ」

秀一が焼却炉の前に置かれた柩のそばで、涙ぐんで立っている。直人はいなかった。

それとなく姿を探すと、火葬場の入口近くの木の下に立っていて、先に来て待っていた父の職場関係者が、直人の方に歩いて行くのが見えた。

直人は彼らに頭を下げ、一人一人と握手をかわしていた。それぞれ直人のことを、よく知っている様子だ。肩を叩いて話しかけている。

母をちらつと見ると、母は叔母が付き添う車いすに、放心したように座っていた。

柩を焼却炉に入れる前に読経が始まった。坊さんの読経が続く中、父との別れの時間が迫ってきた。一人一人、柩の小さな窓から、父の顔を覗き込んで、別れの言葉をかけている。

父の顔は不思議なほど、亡くなったそのままに安らかな表情をしていた。秀一から杏子のあとに隆二が続き、直人が柩に近寄り窓をのぞき、何かつ

ぶやきながら合掌している。母は顔をあげていて、直人をじっと見つめていた。

直人のあとに、親しかった父の仲間たちが続いた。みんなが別れを終えると、柩が無機質な音を軋ませ焼却炉の中に入っていった。直人は杏子たちから少し離れて立ち、目に焼き付けておこうとでもするように、じっと見つめていた。秀一がそばに寄っていき、声をかけ手を握った。

扉が閉まる音が響き、「合掌」という坊さんの声と同時に点火する音が聞こえ、人々のため息とも嘆きともつかない叫び声が上がった。

「骨揚げは十二時になります。それまで、控え室でお休みください。このあと、告別式は二時からの予定です」

葬儀社の係員の声が響いた。

「みなさん、本日は父の最期の見送りに参席くださり、ほんとうにありがとうございました。骨揚げは身内だけで執り行いたいと思います。まことにありがとうございます」

秀一は、参列者に向かつて深々と頭を下げた。喪服の集団が動いたのを合図に、叔母は母の車いすを押し控室に歩いて行った。父の仕事関係者が控室に入ってきて、母や秀一、家族に声をかけては部屋を出て行った。直人が入ってきた。周りにいた杏子や家族に会釈をし、母の前に近づき「ご愁傷様です」と型どおりの挨拶をした。

母が直人に両手を差し出した時、直人は明らかにうろたえていた。しかし、前に進んで母の手を握り返した。参列客が母の手を握って帰っていくので、母は自然に手をだしたのだろうか。

「ありがとう。車に気をつけて帰りなさいね」

いつもの母の口癖だ。杏子は何故かホツとした。秀一が耳打ちすると、直人は小さい声で何か言い少し表情を和らげた。直人がまわりの人々に会釈し、控室を出ようとしたときだった。

「お母さんに、よろしく伝えてね。あんたも頑張つてね」

母が、顔をあげてはつきりした口調で直人に向かつて言った。ハツと一

瞬足を止めた直人は、振り向くと母に向かつて深々と頭を下げた。

杏子は驚いて、まじまじと母の顔を見つめてしまった。

(了)